
学者の卵、曾倉君

砂漠の砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学者の卵、曾倉君

【Nコード】

N2359L

【作者名】

砂漠の砂

【あらすじ】

クラスメイトが、彼女から借りた漫画を、トイレの便器に落としてしまった。しかも、落とした原因が、奇怪なものだった。曾倉はその解決を頼まれて……。

「何とか、解決してくれよ！ お前は頭いいんだからさ！」

朝、ホームルームが始まる十分間、曾倉は静かに読書して過ごすことにしていた。だか、何かにつけその高尚な習慣は妨害されるのだった。

「何か用かね、大宮君」

曾倉は眉間にしわを寄せ言った。

「いやー、大ありなんだよ。昨日さ、大事な漫画を学校の便器に落としちゃってさー」

「それがどうしたというのだ」

「それがちよつと大事な漫画でさ」

大宮は明るく振る舞ってはいるが、声が震えているようだった。顔も若干青ざめている。

「まさか、まだそのままにしてあるから、わたしに便器から取り上げてくれとか言い出すんじゃないだろうな？」

曾倉はあくまで冷静に返す。

「とんでもない。すぐに取り出して、今家で乾かしているよ」

「そうか。なら問題ないな」

「ところが問題あるんだ……！ 実はあの漫画、彼女から借りた少女漫画なんだよ！」

「……つまり君は、その大事な漫画をくそまみれにしまった、と？」

「そうなんだよ。って違うって。ただ濡らしちゃっただけ。ところろがそれを正直に話したらさー、あいつかかんかに怒ってさ、もう俺とは別れるって言うんだよ」

曾倉は頭をぽりぽりとかいた。色恋沙汰の相談なら、全くの専門外なのだが。

「よく分からんが、同じ漫画を新本で買って、彼女に返すぐらいし

か、和解の道はないと思うがね」

「俺もそう言ったんだ。でも、彼女が言うにはさー、大事な漫画をトイレの便器に座りながら読むなんて、言語道断だって」

言語道断、近頃の女子高生がそんな言葉を知っていて、あまつさえ使うということ自体驚きだ。これは記憶にとどめておくべき事実だろう。

「それは、その彼女の言うとおりだろう。そもそもなんだってトイレで漫画を読んだんだ？」

「いやー、数学の授業中、どうしても漫画の続きが気になってさ、でも授業中に読む度胸はないし……、それで腹の調子が悪いって嘘ついて、トイレにこもって読んでたんだよ」

「それは君が悪いだろ。彼女の言うとおりだ。この上は誠心誠意謝るしかないだろうな。残念だが、わたしにそれ以外に解決の手段は浮かばないよ」

「それが、俺ばかりが悪いんじゃないんだよ……。実はさあ、信じたくないと思うけれど……」

そう言って、大宮はもじもじと口ごもった。

「なんだ、もじもじと気持ち悪い。はつきり喋りたまえ」

「トイレで、化け物を見ちゃったかも知れないんだ。それで、驚いて漫画を便器に落としちゃったって訳」

「化け物を見た？ まさかそれもそのまま彼女に話したのか？」

「ああ」

「そりゃあ、怒るだろう。いい訳としては最低の部類に入るぞ」

「いい訳じゃないんだ。本当なんだって。いいか、トイレで漫画を読み出して五分も経った頃だろうか、急に蛍光灯が暗くなったような気がしたんだ。それで、天井を見上げると」

大宮の顔は、恐怖で引きつりはじめた。

「見上げると、女の顔が天井とドアの隙間から覗いているんだ。啞然としてみると、だんだん顔が大きくなって、だんだん透明になつて、消えた」

「ほう……」

実のところその話は曾倉の興味をひいた。曾倉はこてこての文系で、妖怪談義とか民俗学的説話とかに興味を持っていたからだ。

「実際、その体験をしたのは時間にしてどのぐらいかね」

「さあ、一分もなかった気がするが」

「成る程ね」

「成る程ねって、普段妖怪の本とかばかり読んでる曾倉君のことだから、こいつの正体だって分かるんじゃないのか」

「分からないね。残念ながらわたしは一度も妖怪とお目見えしたことはないのだし。ただ、学校のトイレの隙間から顔が覗くという怪談は、現代の民俗例でも結構ある」

「やっぱり、俺だけじゃないんだ、実際に体験したのは」

「いや、実際に体験した人は、そうはいないと思うぞ。その意味で君は貴重な体験をしたと言えるよ。怪談譚が生まれる、そのきざしに出会えたのだから」

「そうか。怖かったけどな。とにかく、俺が実際に化け物を見たってことを証明してくれよ」

「それは難しいな。ただ、わたしの知識で何か役に立つことはあるかも知れないが」

「とにかくさー、彼女と喧嘩したのもさることながら、怖くって学校のトイレ使えなくなっちゃったんだよ。なんか、化け物を追い払うおまじない、知っていたら教えてくれないか？」

「ふむ。じゃあ、これなんかどうだ」

曾倉はノートに、複雑な幾何学模様を描いて、大宮に渡した。

「これは、東北の山伏達の間伝に伝わる、魔を払う呪術の一種だ。気休めにしかならんだろうが……」

「いや、曾倉君が言うなら、効果あるだろう！ これで安心してトイレに行ける。サンキュー」

その時、教室の扉を開けて、担任の教師が入ってきた。大宮は自席に戻る。

曾倉はため息をついた。もし、世界中に伝わる呪術が全て本当で、伝説や噂話に登場する化け物が現実に存在するとしたら、世界中の文明を支えているのは科学ではなくファンタスティックな魔法になるだろう。でも、現実はそうじゃない。

呪術も、妖怪も、それを体験したと主張するものの側にあるのだ。それが常識的な思考だ。

だが、この世の中にわざわざばかりでもいい、不可解な現象があるのではないか、曾倉はそうも信じていた。だから、今回の件、まじめに調べてみようと思った。

ちなみに夏でもワイシャツの第一ボタンを閉めたままにしておくような曾倉と、髪の毛を金色に染めた不良の大宮の仲がいいのは、理由があった。

曾倉は意外に喧嘩が強いのである。大宮が、町中で他校の不良生徒に囲まれているのを、曾倉が一人で助けたことがあるのだ。それで、二人は仲良くなった。

最近、学校で怪談話がはやっているのは、曾倉も周知の事実だ。例えば、放課後残っていると、窓ガラスの外に火の玉が飛んでいたとか、普段あまり使わない裏階段を下りていると、後ろからゴロゴロと人間の首が落ちてきた、だとか。

だが、具体的に何年生の誰が見たか、ということは知らなかった。実際に怪奇現象にあったと主張する奴に会ったのは、曾倉の十七年の人生経験の中でも、初めてのことだった。

昼休みの時間が始まると、曾倉は菓子パンを食べながら3年生の教室へと向かった。

そこに、鬼島という生徒会役員がいる。かれは2年生の時に、自分の情報収集不足から生徒を一人死なせてしまったという。それ以来、躍起になって生徒達の間でささやかれる噂話の出所を突き止め

ようとしていた。

その死んでしまった生徒というのに曾倉は心当たりがあったが詳しくは詮索していない。

とにかく、鬼島に、今回の怪談話の出所を聞くべきだろう。

「民俗学的調査においては、データの量がものをいうからな」

曾倉はそう独り言を呟いた。

3年5組の教室の扉を開ける。さすがに先輩達の教室にづかずか入っていくのがためらわれ、出入口のところで様子を窺っていると、鬼島の方が気がついて声をかけてくれた。

「よお、曾倉じゃないか。なんか用か？」

鬼島は机に向かって英単語の勉強をしているようだった。忘れていたが、彼は受験生なのだ。邪魔になるだろうか。

「鬼島先輩、お久しぶりですね」

曾倉は文化祭の時に生徒会の仕事を手伝ったことがあった。それ以来、鬼島とはたまに話す仲だった。

「ややこしい話しなら、ごめんだぞ。見てのとおり、俺は受験生で、浪人する気はないからな」

「ややこしいというなら、結構ややこしい話ですが。鬼島先輩、今も情報収集してるんですか」

「ああ。受験勉強の合間を縫って、それなりには、な」

「では、今学校で怪談話がはやっているのをご存じですね」

「もちろん、知っている」

「その出所を、教えてもらえないでしょうか？」

「俺の知りうる限りでだが、教えることはできる」

「お願いします」

鬼島の収集した情報は、端的だった。

まず、教室の窓から、人魂がみえたという話し。あれは、正確には理科室での出来事なのだそうだ。放課後、生物部の奴らが、理科

室で飼っている魚の世話をなどをしていた。その時に怪異は起こった、という話だった。

曾倉は、授業の合間を縫って、生物部で実際に怪奇現象を目撃したという同学年のやつに話を聞いてみた。

「どうだね、飯田橋さん。あまり語りたくないというのであれば、他の人に聞くのだね」

飯田橋というその少女は、まじめで根暗な雰囲気を持っていたから、もしかすると何も喋ってくれないのではないかという危惧を持っていた。

「……別に隠しておくような話じゃないとあたしは思うから、いいわ」

だが彼女の声の質は、意外に明るいものだった。

「ありがとう。で、わたしの限りの情報では、一ヶ月ほど前、放課後の理科室の窓から人魂を見たのだそうだね」

「そう」

「それは具体的に、何月何日のことだったかね」

「あれは、十一月の最初の週の金曜日だったから……」

「……ふむ、では5日ということになるかな？」

曾倉は携帯のカレンダーを見ながら言う。

「時間帯は？」

「多分、夕方の四時半ぐらい」

「では、その時の状況を詳しく教えてくれないかね？ 最初に気がついたのは？」

「最初に気がついたのは、一年生の山口君」

その、山口は最初、窓の外からマツチを擦るようなシュツシュツ、という音を聞いたらしい。それで何かな、と思って外を見ると、火の玉が飛んでいたという。

驚いて「火の玉が飛んでいる！」と叫ぶ山口。

皆は、山口の指さした方向を見る。そうすると、窓を開ければ手の届きそうな所を、右から左へ火の玉が横切ろうとしていた。

「成る程。いや、詳しい話しをありがとう。ところで、山口君が言う、マツチを擦るような音、というのは飯田橋さんにも聞こえたのかね？」

「全然聞こえなかったよ」

「ふむ。それで、火の玉はいくつみえた？」

「わたしは三つみえた。でも、山口君は大きいのが一つだって言ってるし、実は微妙なところで言っていることが食い違っているのよね……」

「そうか。いや、貴重な休み時間を使わせてしまつてすまなかったね。そろそろ失礼するよ」

「今の話して、何かの役に立ったかしら？」

「ああ、十分ね。では、失礼する」

授業が始まるので、曽倉はいったん自分の教室に戻った。

そして、授業中に飯田橋の言ったことを反芻してみる。

目撃した怪異の内容が、人によって微妙に食い違っている、というのは興味深い。

なぜなら、例えば口裂け女のように、日本列島の何百キロ離れたところで別人が目撃しようが、その性質はほぼ一致するのが常だからだ。

それは、多くの怪異が人々のコミュニケーションの中から成立することに原因がある。本当は誰も口裂け女には出会っていないのに、あたかもそれが存在しているかのようにコミュニケーションするためには、ある人物が言う口裂け女の性質と、別の人物が言う性質とが食い違っていないはならないのだ。

もちろん、地域差というものはある。北海道の口裂け女と神奈川の口裂け女では、当初その性質は違ったはずなのだ。

しかし、今回目撃した連中同士に、地域差も文化差もない。あるのは個人差だけだ。

この事から、それが心理学者の言う集団幻想のようなものではないことは確かだ。彼らの目に、確かに人魂は写っていたのだ。

こうして曾倉が必死で情報を収集している間だ、なんと大宮は教室の隅で友達数人と喋っていた。

「おい、大宮君。君が無神経だというのは分かっていたが、わたしにこうやって働かせておいて、自分は友人とたむろしているのかね？」

「だって、俺の頭じゃどうせたいした情報はつかめないもん！」

「愚かな！ 君、自分自身のことだろうが！ この調査が進まなければ、君、本当に彼女にフラれてしまうぞ！」

「そんなこと言われたってさ、何すればいいのか分からないんだよ」

この男はどこまでテキトーなのだろうか。こんな奴に彼女がいて自分にはいないということが、無性に腹立ってきた。

「とにかくだ！ 今日中に怪異を体験した人全員から、情報を収集してしまっぞ！ 次は一年生の教室に行くから、大宮君も一緒に来たまえ！」

「え、面倒くさいな……」

「わたしを怒らせたいのかね。あるとき、野蛮な連中から君を救ってやったわたしを？」

そのセリフに、大宮の笑顔は引きつった。

「じよ、冗談だよ。手伝うよ！」

「そうか、では十分じゃない休みだ、行くぞ！」

曾倉の方も、正直言うなら一人で他人ばかりの教室に踏み込んでいくのは、少し胃が痛くなるのだった。だが、見た目のおっかない大宮と一緒に来てくれれば、質問もしやすいというものだ。大宮は、木偶のように立っていてくれさえいい。それで、威圧になる。若干酷いことを考えながら、曾倉は教室を出た。

放課後も色々なところに取材に行って、結局曾倉が自宅に帰れたのは6時を回っていた。

大学ノートを広げ、集めた情報を時系列に整理する。

11月1日、放課後（おそらく午後四時頃か）。教室に忘れ物をした佐々橋という生徒（1年4組）が校舎の北側にある裏階段を下りていると、何かが階段を下ってくる音がした。人の足音とは違った。佐々橋が振り返ると、バスケットボールが彼女の後を追うように落ちてきた。無意識に、それを拾おうとすると、なんとそれはボールではなく人間の首だった。佐々橋は階段から滑り落ちて、大けがをした。

11月5日、やはり放課後、理科室で複数の生徒が窓の外を横切る人魂を目撃した。

11月10日、昼休みの時間帯、中庭で弁当を食べていた複数の生徒が、そこに人工的に作られた池に浮かぶ蓮の葉の上で妖精が踊っているのを目撃した。時間にして十秒ほどの間だったが、確かにそれはそこにいたという。

目撃した奴らが語る妖精の特徴はファンタジーゲームに登場するその様だったが、三人のうち一人は老人だったといい、もう一人は美女だったといい、もう一人は、妖精と言うよりはオークの様だったと語った。人魂事件と同じ、一人一人の言っていることが食い違っている。

11月15日数学の授業中、大宮がトイレで妖怪と遭遇した。数学の授業中だから、おおよそ午前11時から正午までの間だになるか。

それを眺めながら、曾倉は一人思索した。駄目だ、皆目見当もつかない。発生した怪異それぞれの特徴に、共通点がないのだ。

こうした怪異の背後には、何か共通する民俗学的な土台があるはずだ。紫ババア、トイレの花子さん、皆、実は戦前より伝わる伝説を下敷きにして成立していることは、多くの民俗学者が証明している。

今回は、それを見つけないことができない。それが、曾倉を苦しめると同時に、興奮もさせた。もしかしたら、自分は全く新しい伝説の生まれる場に立ち会っているのではないかと。

「遼、ご飯ができたわよー」

キッチンで母親が叫んだ。もうそんな時間になったのかと時計を見ると7時30分をさしていた。気がつけば、腹が相当減っている。曾倉は手を洗うと、食卓へと向かった。

父親はいつも仕事で遅くまで帰ってこないから、食卓には曾倉と母の二人しかない。曾倉の母は専業主婦だったから、大抵は家にいた。

「つかぬ事を聞くが」

「ご飯を食べながら、曾倉はそう切り出した。

「この町内で、怪奇現象の噂話など、たっていないかね」

朝、曾倉と父を送り出したあと、夕飯の準備を始めるまでの時間帯のどこかで、必ず母は井戸端会議に参加しているはずだった。もしかすると、学校以外でも怪奇現象が起きているのではないかと、曾倉はそう考えた。

「あら、遼、よく知ってるわねー。わたしが聞いただけでも三件、そういうニュースがあったわよ」

「ほう、それはどういう？」

曾倉は身を乗り出した。

「一つが、大橋さんの旦那さんが、会社帰りに出会ったっていうのなんだけど。酒屋『白鳥』の左横に、常夜灯がついている電柱があるじゃない」

「そうだったかな」

さすがに曾倉も、町のどこに電柱が立っているかいちいち憶えていない。

「あるのよ。それで、夜の十二時ぐらしかしらね。歩いていると、その電柱の下に托鉢僧が立っていたんだって。で、なにやらお経を唱えている。こんな夜中にあり得ない、と思ってその托鉢僧の顔を

のぞき込んだんだって。そうすると……」

「そうすると？」

「その托鉢僧の顔が、髑髏だったんだって！　それで、旦那さん、一目散に家まで逃げ帰ったそうよ」

「おお！」

それは、怖い。もし自分が出会っていたら、尿を漏らしていたかも知れないな、そう思った。

「それで、あとの二つは？」

「それは、又聞きなだけどさ。あんたの通ってる学校から少し歩いたところに、コンビニがあるじゃない」

曾倉の通う高校は、自宅から歩きで20分ほどの所にあつた。だから、そのコンビニも小さい頃から使い慣れていた。

「そこから、？法寺にある墓場の方を見たんだって。そうしたら、金色の火の粉のような者が、墓場からすうつと空にのぼっていったって」

「ほう、それで？」

「それだけよ」

「じゃあ、もう一つの話しはどんなものだい？」

「これも又聞きなだけど。学校から少し坂を上つたところに古墳があるじゃない。あそこから、なんか神主の唱える祝詞の様な声が聞こえてきたんだって。夜中よ。そんな時間に古墳で神主が祝詞を唱えるわけじゃないじゃない。それで、その人も怖くなつて一目散に逃げたそうよ」

「うむむ、それも結構怖いな。わかった、ありがとう。参考になったよ」

「急にそんな話を訊ねてくるなんて、何かあつたの？」

「いいや、ただ学校で怪談話がやっているから、町中ではどうなのかな、と思っただけだ」

「ふーん」

その後食卓では会話がなかった。曾倉は食器を片づけると、自分

の部屋へと戻った。

「学校だけでなく、学校の近辺でも怪談話かはやっているらしいな。火のない所に煙は立たない、か」

曾倉は机に向かつて、一人悩んだ。情報は集めた、だが、それをどうやって整理する？

「……」

曾倉はパソコンを立ち上げると、即座に氣象庁のホームページを開いた。

怪異が起こった日と、当日の天候が関係しているかどうか分らない。だが、一見関係なさそうなことでも、情報は集めるだけ集めた方がいいのだ。

そして、曾倉は全ての怪異に共通項を見いだすことに成功した。

怪異のあった当日は、判で押したように快晴だった。そして、その前日は決まって大雨なのだ。

だが、それがどうした。天候と怪異という全く関係のない出来事を、論理的に結びつける要素は何だ。

再び彼は頭を抱えた。

優秀な学者なら、今までの情報をどうやって整理する？

曾倉はふと目にとまった考古学の論文集を本棚から取り出して、ぱらぱらとページをめくった。そして、一つの図が載ったページで動きを止めた。

地形図に、縄文時代晩期の遺跡を黒点でプロットしたものだ。それによって、おのおの遺跡間の関係や、当時の海岸線がどの当りにあったかがみえてくるのだ。

これは、ひらめいたかも知れないぞ！ 少し事例は少ないが、今回の怪談話で、これをやってみればいいんだ！

曾倉は本棚から高校周辺の地形図を取り出して、机の上に広げた。そして、怪異のあった場所に×印をつけていく。

「酒屋『白鳥』、コンビニ、八幡山古墳、学校と」

地形図の等高線を見ると、この辺りの地形は学校を中心とした盆地になっていることが分かる。そして、怪異のあった場所は、きつちりとこの盆地に収まった。

「ふむ、あの高校が盆地の中心か、初めて分かったことだな」

次に、気になったのが、町中に張り巡らされた水路である。高校があり曾倉の住むこの町は、湧き水の町としても有名だ。その水を細い水路を通して町中に巡らせている。戦前までは、生活用水として利用されていたぐらいだ。高校をぐるりと一周した後で、水路は地下へともぐる。

怪異のあった場所は、全て水路沿いだ。

前日、大雨が降る。水路から水があふれ出す。翌日、快晴、水は乾く。

あと少しだ、あと少しで答えにいたる。

一番下流にある学校から、水路をさかのぼってみる。そうすると、コンビニ、酒屋、古墳……、皆同一の水路でつながっているではないか！

そして、水源は、古墳の少し北にある、明王湧水だ。

明王湧水から、何か原因となるものが流れてきたのか？
いや、違うな。だとすれば、明王湧水で怪異が目撃されていないのは変だ。

古墳。そう言えば、あの八幡山古墳、11月はじめの大雨で、土砂崩れを起こしたんじゃないか？ 一度も玄室まで発掘調査されていない古墳が、玄室がむき出しになってしまっただけに。

まだ、その修復はされないままのはずだ。

原因は、古墳にある。

考えられる仮説としては、古墳の玄室から何らかの幻覚物質が流出した、ということだ。怪異の原因が、幻覚物質だとしたら、人魂事件や、妖精事件で目撃者の言っていることが食い違っているのも

頷ける。

幻覚物質が、ある一定量空气中に流れてくる。皆、それを吸い込む。そして、誰か一人が、火を連想する音を聞く。それが引き金になって、彼は教室の外に人魂を見る。そして、人魂が飛んでいると叫ぶ。

それをきっかけとして、やはり幻覚物質を体内に取り込んでいた周囲の人物も、人魂を思い浮かべ、その幻覚を見るのだ。ただし、それぞれの脳内で、『人魂』という言葉で連想したイメージをだ。一人一人が連想するイメージは違うから、見えたものも違うのだ。

曾倉は携帯をとると、大宮に電話した。

二十秒ほどコールすると、ようやく大宮は出た。

「なんだ、曾倉君か。何のようだ？」

「分かった。君の見た化け物の正体が。原因は八幡山古墳にある！幻覚物質だ」

「はあ。何を言っているのか、全然分からないぞ！」

「ああ、もういい。分からないなら、もういい。明日詳細は話す！」

曾倉は一方的に通話を切ると、家を飛び出して、古墳に向かった。

夜の闇の中を、走る。戦闘機が低空を飛行している。鼓膜が破れそうだ。

体力には自信があった。だが、古墳までの距離はえらく遠いものに感じられた。

古墳の唯一の入り口である坂道まで来た時、曾倉は啞然として立ち止まった。

ワゴン車が一台停まっている。そして、黒いスーツを着た男が三人と、白衣を着た女が一人、今にも古墳内に入ろうとしていた。全員、防毒マスクのようなものをしている。

女が、立ちつくす曾倉のに気がついた。

「あら、こんな夜中に、散歩。って分けでもなさそうね」

顔は見えないが、声の質からいつてまだ二十代前半だろう。

「あなた達こそ、古墳で何をしている？」

「あら、わたし達は国のれっきとした調査委員よ」

彼女はそう言っ、身分証明書を見せた。国立衛生局、と書かれていた。

「その格好からすると、古墳の中にある幻覚物質の調査ってところか？」

曾倉はなるべく冷静見えるよう、言った。

「あら。どうして知ってるの？」

「学校で、幻覚騒ぎが起きてる。原因は、この古墳以外に考えられない」

「そう、よく分かったわね。でも、ここからは大人の領域よ。危険だから、この古墳には絶対立ち入らないこと。そして、家に帰って寝なさい」

翌日、朝食を摂りながらテレビを見てみると、やはりあのことがニュースになっていた。

「町や学校をを騒がせた怪奇現象の原因は、古墳から流出した新種のカビでした」

ニュースのキャスターはそう語った。

多くは曾倉の予想どおりだったが、幻覚物質を出していたのがカビだと言っことには思い至らなかった。

まず11月初日の大雨で、古墳の土砂が崩れ、玄室がむき出しになる。

今まで玄室ないで細々と命脈を保っていたそのカビが、古墳の周りを巡る水路に流入する。

そして、住みごこちのいいじめじめしたところで繁殖する。思えば、学校内で幻覚騒ぎのあった場所はみな、じめじめした場所だった。トイレは言わずもがな、首が転がってきた裏階段は雨が降ると

びしょびしょだったし、中庭の池は水路の水を直接流し込んで使っている。理科室で魚を買っている水槽の水も、水路が由来だ。

しかし、ただ繁殖するだけでは幻覚物質は放出しない。翌日の朝、良く晴れた日、繁殖した場所の乾燥が始まる。気温も上がる。

そうするとカビは子孫を残すべく、胞子を放出する。その微細な胞子の中に、強烈な幻覚物質が含まれていた、ということだ。もつとも、ある程度まとまった量を吸い込まない限り、幻覚は見えないらしいが。

古墳の玄室の外の環境は、カビにとってことのほか厳しいものだったらしく、結局彼らはほとんど子孫も残せぬまま死滅していった。だから、幻覚騒ぎがこの程度ですんだらしい。ただ、雨が降る度に古墳からの流入は続いたから、怪奇現象もその度に発生したのだ。

曾倉は身震いする。これは、バイオハザードではないか。

そのカビの生命力が弱いと言われているとはいえ、古墳から流出してしまっているではないか。どこかで細々と生き残り、やがて外界の環境に適応して、爆発的に繁殖したら……。

だが、町中に消毒薬をまくわけには行くまい。どうするのだ。

曾倉は重い気持ちで学校に出かけた。

「曾倉、ニュース見たぞ！ お前のいったとおり、原因は古墳だったな！ 怪異の正体も、全部幻覚だったんだな！」

教室にはいると即座に大宮が話しかけてきた。

「君は暢気だな。これはバイオハザードだぞ」

曾倉が言くと、大宮は青ざめた。多分、その言葉から、ゾンビを連想したのだろう。

「まあ、致死性の病原体などでなくって良かったというものだが」
そう言つと、大宮はあからさまにほっとした顔をした。

「ところで君、彼女とは仲直りしたのかね」

「まだ。だってニュースになったの今朝だったしね」

「便器に漫画を落とした原因が怪異だったとしても、トイレで読ん

でいた罪は消えまい。彼女、許してくれるかな」

また、大宮の顔が青ざめた。わかりやすい奴だ。

「ああ、冗談だよ。冗談」

そう言つて曾倉は笑つた。大宮も満面の笑顔で笑つた。

（後書き）

自分の中で、かなりあらすじを明確にして書いたつもりなのですが、にもかかわらず書くのが非常に苦行でした。やっぱり小説は楽しんで書かないといけないな、そう感じた作品です。

それでは、ここまで読んで下さった方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2359/>

学者の卵、曾倉君

2010年10月8日15時08分発行